

航空

予科練の思い出

愛知県 杉浦文男

昭和十八（一九四三）年六月頃だったと思う。校長が毎朝の朝礼の時、最近の戦況を説明した後、予科練に志願することを勧めるようになった。各学校に割り当てが来ていたのではないかと思う。学校から引率されて「決戦の大空へ」という予科練の映画も見に行った。いずれ軍務に服しなければならないなら、「ガダルカナルのような飢え死には絶対嫌だ。飛行機の搭乗員なら飢え死には無いだろう。一機当千（一騎当千）」とも言ふこともある。この方が国のためになる」と思

い、休暇で帰省したとき父に話した。志願するには親の同意が必要であった。

しかし、「兵隊なんか駄目だ」と許してくれず、小学校から一緒だったM君に「君はどうしたか」と聞くと、「俺はもう願書を出した」と言う。「俺も行きたい」と手紙を出すと、「そんなに行きたいなら仕方ない、行け」と返事が来た。M君より二週間くらい遅れて願書を出した。

優秀だったM君は、昭和十八年十月一日、松山海軍航空隊、その後フィリピンに進出、戦死してしまっただ。十七歳であった。

私は十二月一日、三重空奈良分遣隊に入隊した（十七歳二カ月）。家を出る時「生還は無い」と思ったので見送りの人達に「では元気に征きます」と挨拶して

出てきた。この時、大勢の人が涙を流していたと聞いた。終戦の時は「戦死した戦友に申し訳ない、近所の人に会わせる顔が無い」そんな気持ちで復員した。

十一月二十六日に出発、名古屋で一泊、二十七日、県庁前広場で壮行会があった。

中日新聞二十七日夕刊には、次のような記事が載った。

「僕ら今ぞ空の御楯 予科練生晴れの進発

決戦の大空に殉ぜん―決意に燃え、学園から〇〇航空隊〇〇分遣隊に入隊する愛知県の甲種飛行予科練習生壮行式は、二十七日午前八時から県庁南広場で挙行した。

この朝、学生服に襟をかけた出陣学徒〇〇名は感激の紅潮を双頬に漲らせて、七時半迄に集合、同八時、軍艦行進曲吹奏裡に壮行式に臨んだ。

草場県軍事課長の開式の辞に次いで、阿部内政部長の挨拶、牧名海軍人事部長（代理・池田少佐）、佐藤名市長（代理・森田教育局長）神戸県会議長の力強い

激励の言葉に応え、入隊者代表、愛知一中藤高道也君は一死以て君国に酬いんと烈々たる答辞を述べ、吉野知事の発声で万歳を南海の空までもとどけと三唱、海ゆかばの全員合唱に闘魂をいやが上にも奮い立たせた。

かくて吉野知事視閲の分列行進から順次市中行進を起し、東邦商業、名商業、名三商の音楽隊と六十二中学校の校旗を先頭に天津橋から櫻通を進み、畏くも明倫中学御在学の賀陽宮章憲王殿下をはじめ奉り、沿道を埋める名古屋市内男子中等学校、郡部中等学校の三年以上、その他一般市民の方歳、歓呼に応えつつ、名駅へ堂々行進を続け肉親知己に見送られて、九時五十分発列車で勇躍壮途についた。」

私たちは奈良県山部郡丹羽市駅で下車、駅前にて「兵籍番号一四七六四番」と所属分隊を知らされ、それぞれ別の兵舎に赴く。兵舎と言っても天理教の各県ごとの畳敷きの宿舎だった。

十二月一日、練兵場に整列、入隊式が行われた。分

遣隊司令から「高山明以下一万七百七十七名に海軍二等飛行兵を命ずる」と告げられ、訓示を受ける。一万人を越える練習生が整然と並び、訓示を一言一句かみしめている姿は壮観の一語につきるものであった。一日も早く役立つよう頑張ることを誓う。

訓練が始まり、学科は中等学校当時の主な学科のほか、通信・受信・送信・手旗信号・発光信号・旗流信号・軍制・運用・体操・精神訓話等があり、通信は毎日のように行われた。「総員起こし」から「巡検」まですべて競走で、一分一秒も気の抜けない毎日だった。

その後、滋賀空に転隊した。琵琶湖の湖畔の滋賀里村の農地。百町歩ぐらいの広さの所に開設された航空隊で、国道の反対側は天津航空隊で、飛行練習生達が毎日水上機の訓練に励んでいた。

昭和二十年に入ると、特攻兵器である人間魚雷、回天震洋艇、咬龍艇等の搭乗員の募集があり、採用された者は川棚・柳井等の基地に転隊して行った。

空襲も激しくなり、「飛行機の生産も出来ないの

はないか」「もう飛行機に乗ることは出来ないだろう」と皆思うようになっていた。上空を一機のB29が飛んで行く。近いうちに空襲があるだろうと思っていると、紀伊水道を北上中の報が入る。琵琶湖を目標に北上し、琵琶湖から東に向かって行く。「また愛知のどこかがやられるな」と思うと、悔しいがどうすることも出来ない。

六月頃、手旗の訓練をしていると、班長が「今、飛行機が落ちたから見てみろ」と叫んだ。背後を振り返り湖面を見ると湖面は波立ち、上空を僚機がぐるぐると旋回している。間もなく諦めて天津の上空から稜線を越えて京都方面に飛び去って行った。毎年八月の盆が近づくと、あの飛行機の搭乗員はどうなったかと思う。

六月下旬頃だったか、ソ連軍が上陸してくるかもしれないということで、第十三期生の一部と第十四・十五期生が舞鶴軍港に転隊した。いよいよ実施部隊だ。魚雷艇に乗るための訓練を受けたり、機関砲の操作を習ったりした。ここには海軍工廠があり、人間魚雷が

沢山並んでいた。「こいつに乗って敵艦に突入してやりたい」と思った。軍港では毎晩のように、寝てしばらくすると空襲になり、敵機が機雷を投下して行った。皆寝不足になってしまう。翌日、掃海艇が出動し、血だらけになって帰って来ることがしばしばあった。

七月上旬頃、福井県飯高町に魚雷発射基地を作るため転隊。本土に接近してきたソ連艦船を撃沈するためのものだ。ここではもう殴られることもなく、のんびりした日が続く。ダイナマイトで魚を捕ったり、魚釣り等もした。

七月下旬、ポツダム宣言が新聞記事に載った。「こんな事を新聞に載せるようでは戦争も終わりだな」と召集で来た下士官が言う。八月上旬、兵庫県城崎に近い日和山に行き、旅館「金波楼」に宿泊して魚雷発射基地の作業に従事する。八月七日、豊川海軍工廠がやられ、中学二年の従兄弟が戦死したと母からの手紙で知り、大変悲しい思いをした。

八月十五日正午、作業を終わって昼食のため旅館に戻

ると、皆が「戦争は終わったぞ」と騒いでいた。「勝ったのか、負けたのか」と聞いたら「負けたらしい」と言い、今まで苦しい訓練に耐えてきたのは何だったのか、大勢の人が戦死したのは何だったのかと思うと悔しくて悔しくて仕方なかった。

八月二十日頃、いろいろな書類を焼いて舞鶴軍港に帰って来た。軍港も空襲でやられ、岸壁にいた海防艦の姿も無かった。八月下旬、青森県で働いていた朝鮮半島の人々を乗せた「浮島丸」が入港してきて、兵舎すぐ前で大爆発を起こして沈没してしまった。虚脱状態になっていた私は「またやられたか」と思っただけで、立ち上がって見ようとする気力も無く壁にもたれかかって座っていた。飛び出しているって救助したり、支給された衣服を分け与えた人もあるという。

平成七年十二月三日、豊橋で「エイジアンブルー浮島丸サコン」という映画が上映されると聞き、見に行った。こんな有名な事件なら見ておけば良かったと思う。

八月二十七日、東舞鶴駅発の復員列車で家に帰っ

た。予科練出身者は反乱を起こす危険があるというこ
とで、召集で来た人達と一緒にいの一番に帰宅させら
れた。

今も忘れられない人々

海軍兵学校出身先任分隊長

吉村五郎大尉 「スマートで目先が利いて几帳
面、大和魂これぞ舟乗り」の言葉通りの人だっ
た。

橋本中尉 タタキ上げの分隊長。「お前たちが、
生懸命やっているのを見ると後光がさしている
ように見える」。下士官達が棍棒で殴るのを見
かねてのことと思う。この後しばらくの間、棍
棒を振るわれることはなかった。

文官 国語を教えて頂く。「戦場遠くへ出た時、
水筒の水の最後の一口はとっておけ。私はこの
水で命拾いした」

S分隊士 学徒出陣で来たB大出身中尉。「飛行機
一機作るには七万円もかかる。貴様たちのよう

な者を訓練しなくても一銭五厘でもっと優秀な
奴がいくらでも集まる」と一銭五厘の価値も無
い奴らだとののしる。兵の命は鳥の毛よりも軽
かった。

召集で来ていた一等兵（三十七歳） 「ゆうべは十
八位の上等兵に、棍棒で十発ずつ殴られた。こ
れでも家に帰れば、一家の主人ですよ」召集で
来た人達が若い兵に殴られるのを見るのはつら
かった。

徴用で来ていた人（三十五歳ぐらい） 「こんな事
を言っては親に申し訳ないが、女房が死んだと
きは親が死んだ時よりも悲しかった」

召集で来た下士官（四十歳ぐらい） 舟で移動中、
船酔いで吐いてしまった。たるんでいると殴ら
れるかと思ったら「俺の息子も予科練に行っ
ている」と言っって背中を撫でてくれ、大変気持ち
がよかった。

S練習生兵長（十六歳） 病室を覗いたら尻に包帯
を巻いて寝ていた。膿が滲みでている。どうし

たのかと聞くと、「外出した時、農家に立ち寄りアラレをもらって来たのを見つかつて、S分隊士に八十六発殴られたが気絶してしまった。後いくつやられたか分からない」。S分隊士は常にステッキを持ち歩き、練習生のアラを探しては殴っていた。士官の中で練習生を殴る人を他に知らない。

Y先任教員上等兵曹 夕食準備中、突然棍棒を持ってきて「I練習生（十七歳）、出てこい」とどなり「貴様ら、飯のおかずがまずかるう。班長は人を殴るのは飯よりも好きだ。これをおかずにして飯を食え。軍人精神五箇条を言え」と怒鳴る。一箇条を言うとい発殴る、五発で済むと思いきや十八発もやられて倒れてしまった。倒れた者をなおも殴り続ける。その度にびよんびよん跳ね上がる。死んだようになった者を振り向きもせず、教員室へ帰ってしまった。皆しーんとなってしまう、ものも言わずに食事を始めた。こんなまずい食事は初めてだった。

個人的にやられたことはなかったが、「総員バッター」は時々やられた。昭和二十年三月頃、夜中に「総員起こし」で飛び起きるとなんだかんだと文句を言われて「総員バッター」が始まった。皆見つからないように腹巻を尻の方まで下げる。私は股引きだったので、そのままやられてしまった。後で腫れているかと思いい、そつと撫でてみたらへこんでいたのでびっくりした。一度やられると十日ぐらい経たないと元通りに治らない。辛い治らないうちにやられたことはなかった。

舞鶴の定員分隊では毎晩のようにバッターの音が聞こえてきた。中学三年生ぐらいの少年兵がいたが、かわいそうで仕方なかった。敗戦で軍隊がなくなり、もう二度とあのようなことは復活しないだろうと思う。孫たちの寝顔を見ると、平和な世になって嬉しく思う。